編集者にできること

英文論文誌 B 編集委員長 大鐘武雄
Takeo Ohgane

彼はキーボードを一心に叩く。ときには入力した文章を一気に消して頭を抱えて考え込む。そうやって何日も言葉を紡いできた。彼は今、作業がようやく終わりに近づいていることに喜びを隠し得ない。もうじき完成だ。でも、一体どれくらいの人を読んでくれるだろうか。そんな不安が身を擡げてくる。しかし、すぐに思い直す。いや、きっと大丈夫……カーテンから朝日が透けてきた。あと少しだけがんばろう。そうつぶやいて、また PC に向き直った。

つ まらないフェムト (?) 小説でスタートしたこのコラム。論文誌の編集について少しお話ししたい。

2013 年にブダペストで開催された ICC に出席した折、バンケットを欠席して、オペラ座でバレエを見た。演目が「白雪姫と 7 人の小人」だったためか、子供たちが大勢来ていた。彼女・彼らはイスの上で精一杯伸びをしながら、たまに笑い声を上げて楽しそうに見ていたので、いつも以上にリラックスして観ることができた。終演後に帰る子供たちは、皆一様に、くるくる回ったり、ジャンプしたりと、まるでバレリーナ、バレリーノになったかのよう。表現する喜びは、こんな小さなころからあるものだと感心した夜だった。

我々にとって自分を表現する手段の一つに論文がある。「論文とは研究が一段落して得られた成果をまとめたもの」というのは、余りにも淡白な説明であろう。近年は、業績評価の重要な項目となっているために、論文の数を積み上げること自体が目的となっている面も否定できない。しかし、論文の本質は、自分の成果を広く公開することで、いつか誰かの目に留まり科学技術の進歩に貢献することにあるといえる。その意味で、著者は大きな期待を胸に秘めて、論文を執筆しているのではないだろうか。

成果の発信だけ考えれば、論文誌に頼らなくても、独自にインターネットで公表することが可能な時代である。しかし、膨大な文書が存在するインターネットは、虚実が入り交じった世界であり、信頼性の主張が難しいばかりでなく、検索等で目に留まることすら叶わない可能性がある。一方、論文誌に掲載されれば、その論文が新規性・有効性・信頼性のある研究成果であることを認

めたお墨付きを得たも同然である。正に論文誌が重要な役割を果たしていると言えるだろう。

論文誌の編集者は、著者に論文公開というサービスを提供する一方で、読者にレベルの高い論文を提示し、科学技術の進歩に貢献することを仕事としている。著者の論文に対する情熱に感じ入り、読者が論文を読んではたと膝を打つのを想像して喜びを感じる、得な仕事である。実を言えば、日々多くの論文に対応している間に、事務的に処理することが普通となり、このような本質を忘れてしまっていた。思い出したのは、本稿のおかげである。

我々編集者が、著者や読者から喜びを分けてもらっているのだとしたら、当然報いるべきであろう。それは非常に簡単なことで、論文の採否を迅速に行い、可能な限り早く公開し、なおかつ、容易に入手できるようにすることである。残念ながら、英文論文誌 B の判定までの期間はお世辞にも早いとは言えない。鋭意改善を図っているものの、まだまだ足りないのが現状で、引き続き努力が必要である。

一方、検索性や入手性に関しては、我々編集者が関与できる部分が多くない。会員数を考えると海外の論文誌に比べて購読者数が少ないのは否めないため、通信ソサイエティでは、招待論文や論文賞受賞論文を無料公開する試みを行っている。また、英文論文誌 B では、従来の論文の範囲では収まりきらない「尖った」成果を発表できるカテゴリーの新設を検討している*。このような施策で論文誌の購読意欲を高め、新たな購読者の開拓を行いたいと考えている。

最後に、皆さんにお願いしたいことがある。英文論文誌 B の 2012 年のインパクトファクタは約 0.3 であった。これは、2010 年と 2011 年に出版された論文が 2012 年の 1 年間に平均して論文当たり 0.3 回しか引用されていないことを示している。どの論文にも、著者の真剣な想いが込められている。読者にとって、もし少しでも新たな知見が得られたなら、その想いに応えること、すなわち、引用して新たな成果を生み出すことが、科学技術の発展という我々全員の目標達成に必要なことだと再確認して頂ければ幸いである。

* トライアルとなる小特集の論文募集案内が会誌や論文誌・ホームページに掲載されているので、是非御覧頂きたい。